

下流の細民と文士

田岡嶺雲

十九世紀の所謂文明開化なる者は富者に厚きの文明也、自由の名の下に貴賤の階級を打破せりと雖も、貧富の隔絶はこれによりて益々太甚しきを加えたり。唯物文明の進歩に伴う器械の精巧は、労働者より其職を奪い、文華の発達に伴う奢侈の風は、窮乏者を擠して弥々塗炭に苦しむ。富む者は弥々富み、貧き者は弥々貧す、富む者は常に楽しみ、貧き者は常に苦しむ。朱門の家、馬常に肥えて、丐徒累々途に満つ。肉食の者腹常に便々、冬の短きを消遣の途なきに苦しみ、而して陋屋の裡、眼凹み頬落ちたるの人、秋夜の長きを猶お作業の捗々しからざるにかこつ。今の文明は中流以上の徒を悪徳に陥ると共に、下流社会のものを擠して悲慘の谷に落す。今日の下流社会餓えて而して死せん乎、否らざれば盗みて食わざる可からず、盗みて食うもとより罪なり、然れども人常に伯夷の潔なし、正を守りて餓死せんよりは罪名を受けて生きざる能わず。下流社会の罪惡之を安逸の余に出ずる上流の悪徳に比すれば其の情や憫むべし、而かも人之を罰して仮さず、而かも吞舟の魚を逸して上流社会が汚行淫風をとがめず、嗚呼人の眼は到底明のみをみて暗をみる能わざる乎。且つや貧窶なるもの必ずしも悉く怠慢より来らず、かの罪惡なるもの必ずしも常に自動的ならず、而かも一たび窮乏の淵に沈めば再び浮む瀬にあうこと難く、一たび牢獄の人となれば、世は常に之を忘れずしてこれに齒するを愧ず。嗚呼々々天下最も其運命の悲慘にして、其生涯の最も憫むべきの生涯を描く、豈に詩人文士の事にあらざらんや。世は既に才子佳人相思の纖巧なる小説に飽けり、俠客烈婦の講談めきたる、物語に倦めり、人は漸く人生問題に傾頭して神靈の秘密に聞かんとするの今日、作家たるもの満腔の同情を彼等悲慘の運命の上に注ぎ、渾身の熱血を其腕下の筆に瀉ぎ彼等憫むべきの生涯を描き、彼等無告の民の為めに痛哭し、大息し、彼等に代りて何ぞ奮て天下に懇うるを為さざる。ユーゴーが筆底雷震い濤湧く所以のものは、彼が常に此等無告の民の為めに憤り、彼等の運命の悲慘に泣きて人道を絶叫するの聲によるにあらずや。近時ユーゴーを説く者漸く多く、(数年前に在りて思軒が訳せしものは、ユーゴーが見聞の一瑣話に過ぎざりしのみ)無腸道人は「日本」に「九十三年」の梗概を、鈴浦漁人は「ノーツルダム塔」を概論し、而して又氏の大著「悲慘(レミゼラブル)」は桜痴居士の筆によりて「アナ無慙の浮世」なる戯曲に訳し出されんとすと聞く。嗚呼一葉の落つるを以て、天下の秋を下し得べくんば、此等の事世人の漸く意をかの人生問題とともに、社会問題に傾注し来

りしを知り得べきに非ずや。然れども先ず自ら動きてる後人を動かすべし、我先ず涙下りて而る後能く人を泣かしむべしとせば、今の貧窶者に代りて天下に慇懃とするもの、必ず眼中万斛の涙あり、胸中万斛の血あるものにして始めて得べし、軽薄なる幫間者流の作家、浅膚なる才子肌の文士に、其純潔を洩さしむ可からず嗚呼誰かこれをなすものぞ、嗚呼誰かこれをなすものぞ。

(一八九五年九月稿)